

群馬・桐生と沖縄つなぐ

上村豊の「歩行」

岡田 有美子

「買上」とは東京藝術大学（以下藝大）の卒業・修了制作の中から優秀作品を大学が買い上げる制度である。開催中の「買上展」は藝大が所蔵する1万件を超える「学生制作作品」から選抜し約100件を展示した初の試みである。

油画専攻で榎倉康二に学



上村豊《早佐織物工場》（1994）

工場の足跡、風景遺す

行為と思想の痕跡

なめ、一種の資料として作品の一部を保存するものである。

上村は『草紙博物工場』の制作年より展覧会「桐生再演」を仲間とともに企画・運営し、10年以上「桐生へ通って」「特定の場と時間」に「分かち難く結び付く」作

ため、一種の資料として作品の一部を保存するものがある」

上村は『早稲穂物工場』の制作年より展覧会『桐生再演』を仲間とともに企画・運営し、10年以上上桐生へと通って「特定の場合と時間に分かち難く結び付く」作

ただし、それは「作品」ではなく、買上の際に上村が付した文章には「この作品は、私自身の制作に関わる一連の行為、制作および展示期間における私の意図に拠らない外部環境からの諸作用、そしてその行為や作用の痕跡を残す『素材・資料』」というような大きく分けて3つの要素から成る。(一) 作品の全体は、特定の場と時間に分ち難く結び付いて成立する、というその性質上、完全な形で再構成あるいは再展示は困難である。見えて、それは「作品」を制作し続けた上村は、画廊や美術館、また作家やキュレーターといった分割された制度化した役割への違和を表明しており、「場」の選定や交渉事も含め制作から展示、記録まで何でもできる、用務員さんのような存在を理想としていた。今回展示された「素材・資料」は、権威とされる藝大へ自作が買上げられることの抵抗、自己批判として、また「油画」という枠組への批評としても機能しているように見える。

作品踏んでしまった来場者足跡さえ残す選択をした村は、自身を「場」に對して「受動的」と分析しつつも「反転」してなにと桐生という場所性の方に引つ張られてしまふとも語った。意圖せず起こる事象を受け入れつつも「場」と自身の關係の「反転」を待っていた。

（キュレーター）

行

WANG

藝大コレクション
展2023「買上展」は、
5月7日(日)まで東
京藝大美術館本館展
示室で開催されてい
る。上村氏の作品は
第2部「油画」部門
で展示されている。

(キュレーター)